

せたかむら

年表で読む 古平の歴史

《39》

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-12590

第132号・平成12年9月1日

小学校は「本校」という呼び名が定着しました。

■温習科を設置

浜中小学校に修業年限一年の温習科が設置されました。ここに進んだのはわずか三人しかいませんでした。温習科は特別の教科書はなく、簡易科で学んだ内容をさらに復習することが主な学習でした。

浜中小学校に修業年限一年の温習科が設置されました。ここに進んだのはわずか三人しかいませんでした。温習科は特別の教科書はなく、簡易科で学んだ内容をさらに復習することが主な学習でした。

■『教育勅語』が下付

明治二十三年十月七日、新しい小学校令が公布されました。が、これは今までのものと違つて市制や町村制に即した詳しい規定が示されました。しかし、北海道ではまだ市町村制度が無かつたので、厳密にこの規定に従うというものではありませんでした。

同年十月二十三日、その後の

日本教育の根本精神とされる『教育に関する勅語』、一般に言われるところの『教育勅語』が発布になり、謄本が全国の学

校に下付され趣旨の徹底に努め

るよう達しが出されました。

この倉庫は開拓使当時、税として納めた海産物などを保管するためのものでしたが、翌年六月、新校舎が建設されるまで仮

當時は、修業年限が三か年の簡易科が三学級あり、二百人ほど（明治二十一年度の在籍が二百一人）の児童が在籍していました。と思われますが、港町（チョペタン川と厳島神社の中ほど）にあつた倉庫を使って授業が行われました。

この倉庫は開拓使当時、税として納めた海産物などを保管するためのものでしたが、翌年六月、新校舎が建設されるまで仮

當時は、修業年限が三か年の簡易科が三学級あり、二百人ほど（明治二十一年度の在籍が二百一人）の児童が在籍していました。と思われますが、港町（チョペタン川と厳島神社の中ほど）にあつた倉庫を使って授業が行われました。

そして翌年、新地小学校群来分教場が群来村恵比須神社前に開校しましたが、それから間もなく明治二十四年十月、新地小学校は沖小学校・沢江小学校・群来分教場と共に、浜中小学校の分校となり、それ以来、浜中

明治二十六年七月、浜町（現

学年	男	女	計
尋常科四年	二〇	五	二五
尋常科二年	二九	四	三三
尋常科三年	三一	一二	四三
合計	一一三	一七	二三七

→浜中小学校女子児童



北海道・樺太・千島を探険

最上徳内 蝦夷 紙

を読んでみましょう

5

越年役・並税
蝦夷地で松前・箱館・江差の

三港は有名であり、諸国からの商船が多く入り艤(とも)を並べて船がかりする港です。三か所ともそれぞれに沖口(おきぐち)番所があつて、出入りの船を調べています。船に乗って来る人につ

いては、行き先や宿泊先、商売を確かめてから上陸させ、もし武士・虚無僧(むそう)・回国の十六部(えいじゅぶ)・修行僧(ぎょうぎやくそう)・懶惰(えだななまけ者・無精者)に見られる者は、決して上陸を許しませんでした。そのまま船に乗せて置いて押し返します。

もし蝦夷地に用事があつて添え状を持つていたり、身寄りや手づるのある者についてはよく確かめた上、十日間の滞在をしました。諸職人・芸者なども勝手に歩き回ることは出来ませ

んでした。

また、他国の商人や狩猟をする者が歩き回るので、越年役として、一か年にについて錢(ぜ)一百文、正月から五月までいる者は半役として錢六百文の租税を納めさせた。

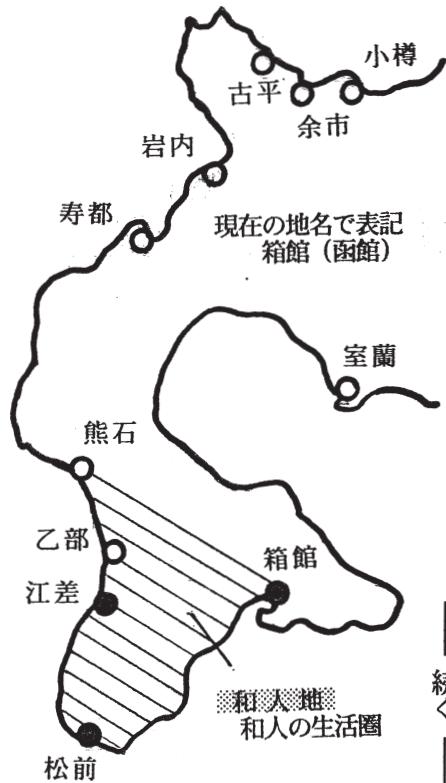
蝦夷地ではこのように、何によらず税を取り立てる土地柄なので、何一つとして税のかからないものは無いと言つてもよいほどです。

【注】松前の三港と沖口番所
蝦夷地と本州との交通は、松

監視するのが役目で、日雇い・諸職人など無用の者が入り込んで来て越年すれば、貯えた米穀を消費するばかりなので、固く禁止しているが守られない。ことに百姓の家数が増えるのは止めようがない。年々藩からお触れが出て我々も常に取り調べをしているが、それでも百姓の家数は増え続け、米穀の値段も高くなり、止めることも出来なくなつてしまつた。

私たち一同、蝦夷地というのはなんとも格別なお国柄のようないました。

前藩の制度として福山(松前)・江差・箱館を三港といつて必ずこのこの三港を経由させ、ここにそれぞれ沖口番所を置いて取り締まりをしました。沖口の起源は非常に古く、沖口奉行の名は寛永七年(1630)すでに見えていますが、その沿革ははつきりしません。沖口奉行は番所の長として、船舶・旅人の検査や取り締まりをしたり、またこれらから諸税を徴収するのがその任務でした。奉行の下に吟味役がいて、これは天明七年(1787)に設けられましたが、この下代・小使がいました。



— 続く —

「私どもは、このようなことを勘兵衛という者が私に言つたことがあります。

遙がなる故郷の思い出

わが闘病日記

[69]

橋 義 春

癌（ガン）——つづき——

今から二十年ほど前に、ガン予防のために健康補助薬品の『クマ笹エキス』を飲んだことがある。売り出している会社は誰でも知っている一流の会社で、『クマ笹エキス』に関する健康雑誌も出していて信用はある。使用体験者の記事を呼んでいる内に、「私も飲んでみようか」という気になってきた。

試しに飲んでみたがドロリとした液体で、黒砂糖を溶かしたような味がした。成分は『丸山ワクチン』と同じ多糖体だそうで、何となくガンの予防に効きそうだが、問題はその価格だ。

ぶらりと散歩に出て立ち寄った本屋で見た『ガンに効く驚異のプロポリス』という健康雑誌だった。手に取って立ち読みしている内に何となく買ってしまった。著者は漢方医の木下繁太郎博士、博士は自分でガンを体験されており、またプロポリスの研究者でもあった。

私は木下博士の本を読んでいでは、結局私の方が長続きせず止めるはめになつたが札幌にいる私の妹は、いまだに東京から取り寄せて飲んでいる。やつぱり身内にガンが多いので怖いそうだ。

ガンに効くといわれている、数ある健康補助食品の中から「プロポリス」を選んだのは、

むかしの 小樽手宮市場の風景

竹 内 コ ト

などと買つて来ます。田舎から出て行つた私には、その市場というものが珍しいらしく興味がありました。

ある日、私は市場というのはどんなところなのか見たくて、叔母さんについて行つて見ることにしました。

小さなびん入りで、一本一万千円もする。一ヶ月に二本は必要である。いくら何でも一か

小学校を卒業して札幌へ出る少しの間、小樽の叔母さんの家に居たことがあります。

叔母さんは毎日のように、近所の仲の良い奥さん方といつしよに市場に出かけては、食料品

にどう効く」「なぜ効く」、主な薬効成分であるフラボノイドなどのことが分かつてきました。私が、プロポリスに関係する本を四冊も買うのを見て驚き、「図書館へ行つたら……」と言つても、忘れたころに本棚から引張り出して何回でも読み返すのが趣味のようなもので、自分の学習だと思っているのでムダではない。

私がプロポリスを飲むのはガン治療に飲むのではなく、ガン予防のために飲むのであり、或は一生飲み続けることになるかも知れない。

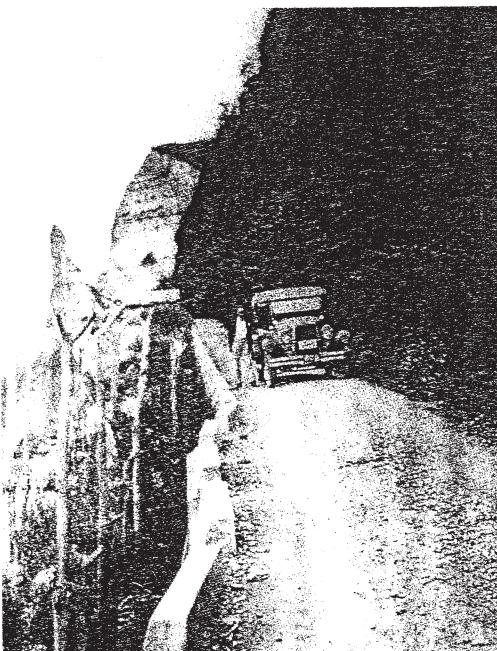
——次号へ続く——

➡(次ページへ続く)

沖村街道を走る

フオード車

尾崎行雄（豊堂）が来町



明治四十二年、それまでの沖村（沢江間）の道路改修工事が行われ、道路と三か所の隧道が拡張され、道路を石垣などで補強して車馬が通れるようになりましたが、時代になると波が道路まで上がつて来て危険でした。その後も時代で度々破損しましたが、大正五年の歳末に襲つた暴風雪で大きな被害があり、基礎まで破壊されてしまいました。

同七年五月道庁の直轄として着工され、年末に完成しました。

同十三年十月九日、『憲政の神様』と

と称され、潔癖孤高の政治家として尊敬を受けていた尾崎行雄が、余市町からの山道を初めて自動車で越えて来て、古平小学校で講演会が行われました。「こんな危険な道路は、命が幾つあつても足りない。」と言つて、定期船で帰つたというエピソードが伝えられています。

この市場の中では魚屋さんの呼び声が一段と高く威勢がいいようで、客と大声でやりとりしているのを聞いているだけで樂しくなります。私も魚は好きなので、その買物の様子を立ち止まって見ていました。

ふと見るとそこに、手のひらぐらいの大きさのカレイの頭と尾を切つたものを、針金に刺してまるでだれのように店先に下げているのです。それがまた何ともいえないほど食欲をそそるのでした。

市場の人たちは、朝の暗いう

※（前ページから続く）

午後から行つたのですが、午前中は準備で、午後からが買いました。市場の中は活気があふれて、誰かまわづ人さえ見れば

「サ—いらつしやい、いらつしやい！」と、大声で声をかけま

す。田舎では見られない光景

でもいらっしゃくて、明るい声でな

にか話し合つては品定めをして

います。

「一山いかがですか」

と、おかみさんが客に声を掛け

ると、それにつられるように客

が手に取つて見ていました。

当時の手宮市場は小樽でも大

きい市場で、それからも買物に

行くこともありましたが、いつ

も客でごつた返していました。

始めのころは人ごみで、満足に

買物をすることも出来ませんで

した。

古平から出て行つたばかりの

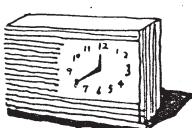
ときは、ほんとに何を見ても驚

きでした。

今は各地に大型店が出来てい

るようですが、

そんな話を聞く度に昔のことなどをちょっぴり思い



断章小説【ふるさと遙か】第14編

小さな恋人

吉川義雄

清朝から台灣を引き離して、日本が統治して以来六十余年が経つていた。異民族との付き合い下手な島国根性の日本人だが、六十年余の時間の中で試行錯誤の成果も少しはみられ、表面上は落ち着いた形になつてはいた。しかしそれも、日本敗戦の日を境にして急変した。

た要衝警備の依頼をしてきた。戦争が終わり、兵たちは帰心矢の如しという時期であり、顔を見合させて戸惑いをしていた。台南基地から山間部に數十キロ入った村に、吉野軍曹たちが警備を頼まれた軍の倉庫があつた。後宮庄。人口が百人ほど、濃い緑の森に囲まれた小さい村は、戦争も知らぬげな静かさで兵隊たちを迎えた。

言葉を繰り返して、吉野から離れなくなっていた。

ハレと呼ぶその女の子は、吉野が母親の仕事の衣服修理に軍服を持って行つたときから、父親に甘える娘のように彼につきまとつて離れなくなつた。

ハレが生まれて間もなく、父親は軍属として徵用され、ニューギニアに行つたままだと、若い母親は言葉少なに語つた。

う指示は、日本に帰る日が来た
ということでもあつた。

村の入口に二台のトラックが
迎えに来ていた。大勢の村人た
ちが見送りに来て、兵たちと別
れを惜しんで泣いていた。

母親の腰にすがつて、ハレは
目ばたきもせずに吉野を見つめ
ていた。何か重大なことが起こ
ろうとしていることは分かる
が、吉野が居なくなるなど分か

植民地としての永い束縛と被支配の苦痛からやっと解放されるのだ。至るところで衝動的な反乱の激痛が走った。島内の日本軍はまだ武装解除される前で、無言の圧力が騒ぎの拡大を防いではいた。

村の小さな広場に孔子廟があり、村人の信仰を集めていたらいい。しかし、ここでも日本人の横暴は廟から孔子像を排除させ、天照大神の神札を祀らせたという。同じ愚劣を異国の各地で何度繰り返したことか。

父の顔も愛情も分かりようのないハレが、吉野をいちずくに慕つてゐる姿を見つめながら、彼女は笑顔の中で時々複雑な吐息をついた。

吉野が勤務中であろうが無からうが、炎暑でこげつくような道を、ハレはトコトコ一人でやつて来る。「ヨシツ、コイツ」

隊門の前でハレが叫ぶ。指揮官

りようもなかつた。
トラックが動き出したとき、
母にへばりついていたハレがは
じかれたようにトラックを追つ
た。「ヨシッ、コイツ」狂気の
ような絶叫を繰り返してハレがは
走つた。あふれる涙のハレの視
界から、黄土を巻き上げて、吉
野の車が遠ざかつて行つた。
△この稿終わり△

教育とかのおかげで日本語に不自由はなく、意志の通じるうれしさを吉野たちは感謝した。兵たちも有り余る時間を持て余していたから、すぐに村人の中に解け込んでいった。

も仲間たちもケラケラ笑いながら、「吉野ッ、彼女が来たぞう」と知らせる。彼が勤務中でも不可抗力の出来事として、たゞちに仕事から外された。平和はのどかであつた。

私は仕事柄、年に一度は全国を廻っていましたが、その土地の名所・旧跡、特に古いお寺に興味がありました。

お寺を拝観してまず目を引いたのが仏像でしたが、よく見ると、時代によって仏像の顔が違うのに気づきました。飛鳥時代（五～七世紀）と奈良（八～九世紀）・平安（九～十二世紀）・鎌倉時代（十二～十四世紀）に作られた仏像は、銅造、木造を含めて顔が違うのです。時代によつて違うのは当たり前かも知れませんが、飛鳥時代のものだけは全く違うのです。

仏教が日本に渡来してきたのは六世紀半ばごろのことです。百済の聖明王の使者が、欽明天皇に仏像や教典を献上したのがその始まりだとされています。今から千四百五十年ほども前のことです。

この時代に造られたお釈迦様は、このお釈迦様の受難は、こ

は、現在でも安居院（あごいん）の本尊として安置されています。しかしどう見ても、私たちがふだん目にするお釈迦様とはかけ離れた顔をしているとは思いませんか。そのころの日本人は神様しか知らない民族ですから、

中国の仏師が作ったインドの仏様を見て、新しい仏教の象徴としての仏像だと言われても、当時の日本人には、それをにわかに受け入れることはとてもできなかつたろう、と思います。

△日本初のお釈迦様の仏像△



△奈良法輪寺の墓師如来像△飛鳥時代の木造の仏像ですが、どう見ても西洋人のお顔です△

仏像探訪(3)

室谷忠雄

は、現在でも安居院（あごいん）の本尊として安置されています。しかしどう見ても、私たちがふだん目にするお釈迦様とはかけ離れた顔をしていて、見るに遭い、叩き壊され、見ての通り髪（みは）はバラバラにどれ、顔は割れ、

△も傷つき、修理されているのがよく分かります。それより二年ほど後に、同じ仏師が作つて法隆寺に安置された釈迦如来像は、現在でも無傷で残つているのです。いつたいこの二十年ほどの間に、なにがあつたのでしょうか。日本の国に仏教が広まつていくのには、きっと激動の時代だつたに違いありません。こんなことを考えると、日本の歴史の壮大なロマンにふれているようで、私は楽しい気持ちになります。

— 続く —

狂
歌

古平町岬短歌会七月詠草

俳
句

古平ホトトギス会

咳すれば加湿器の目盛り確かめむと夜も来て呉る娘よ有難う

池田テル

境界に逸早く咲く勿忘草ブルーに目立つ朝つゆの中

竹内コト

春早く人目を引きしチューリップの萎えし枯萎みにくしこ片付けぬ

柳佳代

畦残る棚田のあとに白樺の生えて此の頃蛙を聞かず

東美知

撒布せし除草薬コートに染じむならん夕べ静けく雨降り出でぬ

鈴木時子

年一度の同窓会も偶然か粹な計らひ七月七日

田中香苗

透明の器に浮かす冷奴わさびを添へてびりりと涼し

堀典子

新調の笛吹きケトルけたたまし返事をしつつ厨へ急ぐ

奥山きよみ

港へと還る海上渡御の船団は勇壮にして船足はやし

丹後初江

大漁の祈願をこめて兄弟(おとうど)奏でる神楽斎場(ゆほ)ゆるがす

涼しさや古平川の流れにも 斎藤波留

白木槿(しろむくげ)夕闇までの命かな 山口悦子

百合を剪る鉄に露の滴りけり 越野敏雄

赤い花ばかりをせゝり黒揚羽 大和田絵伊

終戦忌黙八等も煙草盆 福井幸平

七夕の枝垂れて願ひ風にとび 関口勝志

偲ぶ人また増へにけり盆の月 よしざきり

夏帽子この人どこかで見たような 仲谷比呂古

万縁の湖に突き出(いで)赤城山 越野清治

裏山に別れをおしむ蝉時雨 室谷弘子

帰宅する家の庭樹々新緑に 山口浪

柳

石井愛子

八十路坂盆のおどりに身が動く
亡き友と笑い転げた里の宿
盆おどり月も笑つて合の手を